

大宰府条坊跡

第152次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

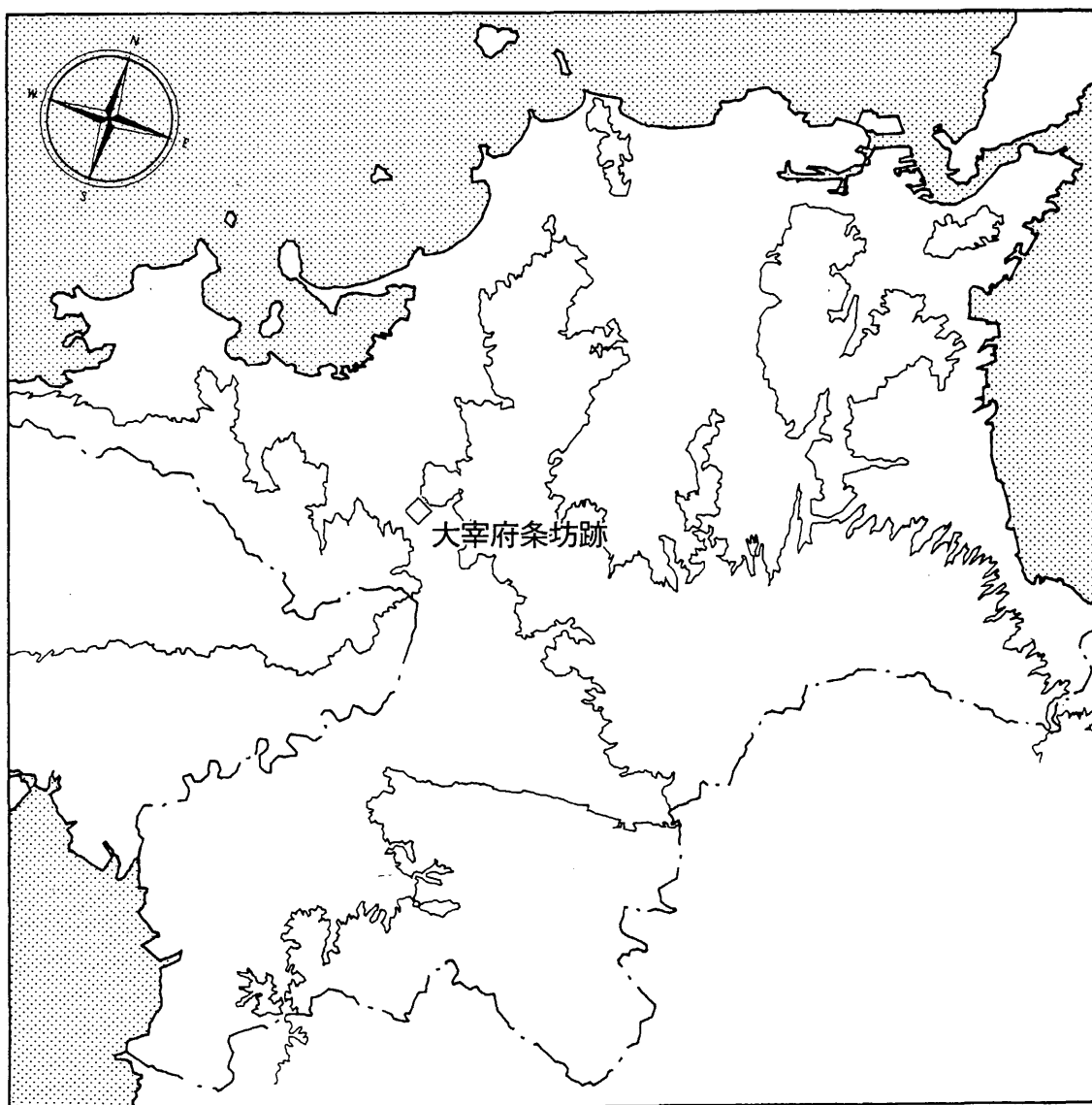
第69集

2001

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第152次発掘調査



例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が平成6年度に実施した（宗教法人）正行寺の修練道場建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、（宗教法人）正行寺の委託を受けて筑紫野市教育委員会・社会教育課文化財担当が実施した。
3. 調査に係る遺構実測ならびに個別写真撮影は、渡邊和子が行った。
4. 本書掲載の遺物の実測は、一部を（有）文化財テクノアシストが、他は（株）埋蔵文化財サポートに委託した。
5. 遺物写真の撮影については、フォトハウスOKAに委託した。
6. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
7. 報告書掲載の図版の製図は、（有）文化財テクノアシストに委託した。
8. 挿図中に使用した方位は、国土調査法Ⅱ座標系が基準で一部磁北を使用した。
9. 遺物の復元および整理作業には、浅谷芳江・加藤美智子・高木保子・松尾敦子・百田愛子・山内妙子が従事した。
10. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

目 次

本文

	頁
I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	1
III. 調査の内容	4～13
IV. 下面の概要	14
V. まとめ	22

挿図 (Fig.)		頁	図版 (PL.)	頁
Fig.1 周辺遺跡分布図	(S1/25,000)	2	PL.1 上面全景	6
Fig.2 調査地点位置図	(S1/5,000)	3	PL.2 胞衣容器出土状況	8
Fig.3 上面遺構配置図	(S1/100)	5	PL.3 埋甕出土状況	10
Fig.4 胞衣容器出土実測図－1	(S1/10)	7	PL.4 胞衣容器	11
Fig.5 胞衣容器及び埋甕出土実測図－2	(S1/10)	9	PL.5 胞衣容器及び出土遺物	12
Fig.6 埋甕出土状況実測図	(S1/10)	10	PL.6 下面全景	18
Fig.7 胞衣容器内出土遺物実測図	(S1/2)	13	PL.7 下面近景・SD2・3土層断面	19
Fig.8 SD3出土遺物実測図	(S1/2)	14	PL.8 出土瓦	23
Fig.9 下面遺構配置図	(S1/100)	15		
Fig.10 SD2実測図	(S1/40)	16		
Fig.11 SD3実測図及びSD2・3土層図	(S1/40)	17		
Fig.12 SD3出土瓦実測図－1	(S1/4)	21	表	
Fig.13 SD3出土瓦実測図－2	(S1/4)	22	表－1 出土瓦計測表	20

I. 調査に至る経過

(宗教法人) 正行寺では、筑紫野市二日市933番地3に信徒の錬成道場を建設する計画があり、市教育委員会社会教育課文化財担当に予定地内の文化財の所在の有無についての照会があった。

これを受けて市教育委員会では、予定地内の遺跡の所在を確認するとともに試掘・確認調査が必要の旨を伝え、試掘調査を平成6年1月21日に実施した。墓が確認されたことと予定地が推定大宰府条坊跡内である試掘調査の結果をふまえ文化財保護法第57条2の届出が正行寺より提出された。

市教育委員会では直ちに福岡県教育委員会に進達し、県教育委員会からは建築前に本調査を実施することとの指示を受け、申請者に伝達し本調査の実施の協議を行った。

また試掘調査で確認した墓の埋葬者については、事前審査担当者がかなり追跡調査を実施しているが明確になっていず結果は本調査に委ねられた。

発掘調査は、平成6年度の事業として平成6年5月13日付で(宗教法人) 正行寺と市教育委員会が埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、6月1日より現地での調査を開始した。

なお調査の関係者は下記のとおりである。

総括	教育長	永 渕 正 敏
	〃	高 嶋 正 武 (現任)
	教育部長	永 田 晋 一
	〃	岡 部 隆 充 (現任)
庶務	社会教育課課長	岡 部 隆 充
	文化課課長	田 中 哲 也 (現任)
	文化財担当係長	森 實 秀 美
	課長補佐兼係長	古 賀 幸 信 (現任)
	臨時職員	中 富 貴代美
	〃	西 村 真 美 (現任)
事前審査	技 師	草 場 啓 一
発掘調査	〃	渡 邊 和 子
整理報告	〃	〃

II. 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ真中に位置し、東から三郡山塊と西からは脊振山塊が迫り、その間を有明海に注ぐ筑後川の支流である宝満川や博多湾に注ぐ御笠川の支流である鷺田川などの河川が走り、狭長な平野が形成される。この狭長な平野部北側の太宰府市には大宰府政庁が置かれ、筑紫野市北部にかけて条坊制が敷かれていたと考えられている。

第152次調査は筑紫野市の北部にあって推定条坊跡左郭19条2坊に位置する。また調査地点の周辺は天正年間に設置された宿場町でもあり、江戸時代では博多街道の宿場町として栄えていた場所でもあった。

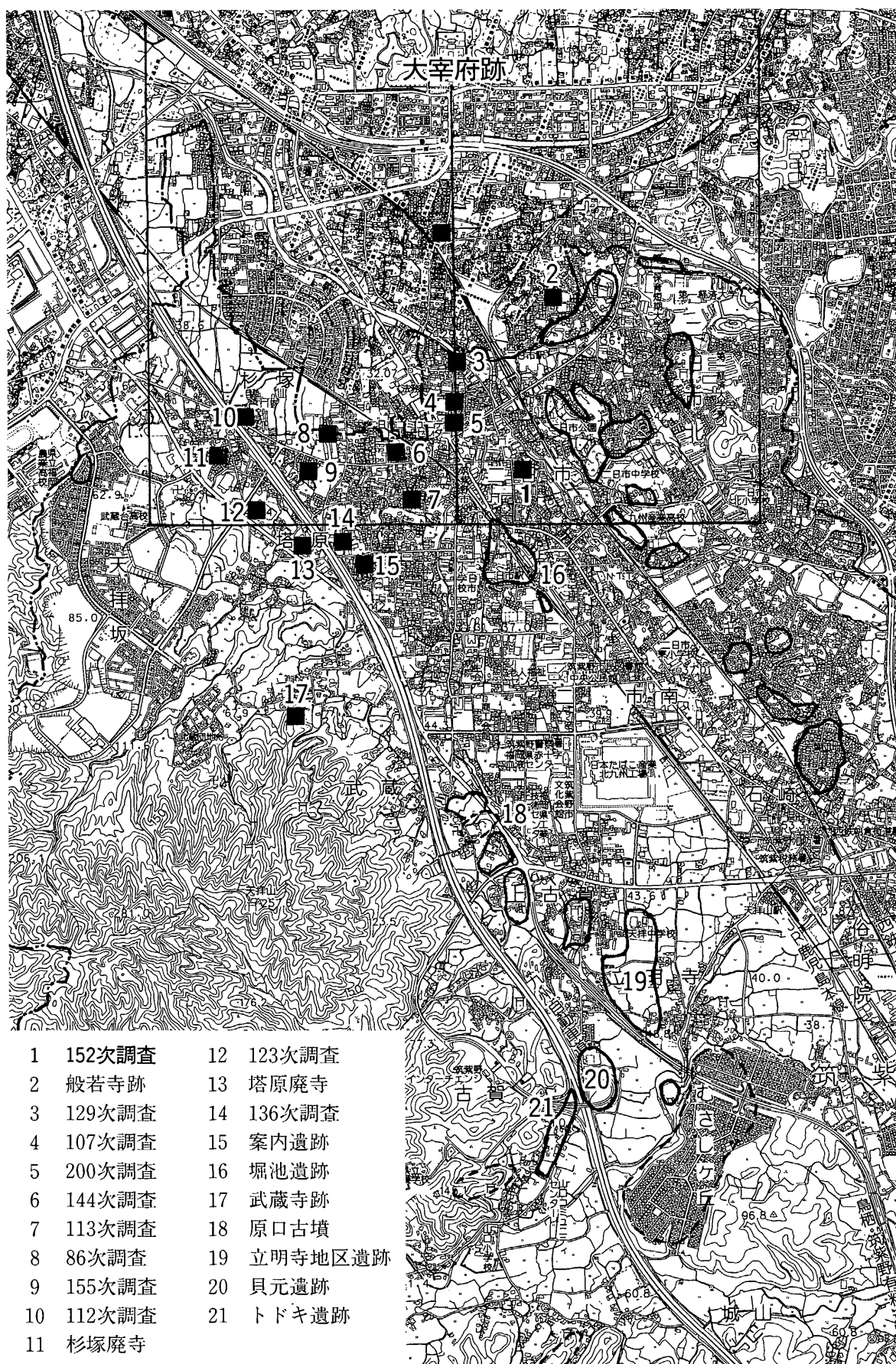


Fig.1 周辺遺跡分布図 (S1/25,000)



Ⅲ. 調査の内容

当初発掘調査は、試掘調査にて確認された墓地群の検出ならびに事前審査担当者より託された埋葬者の追跡調査を主な目的として実施した。

剥土完了後、遺構検出を行ったが試掘調査で確認された骨壺はなかなか検出されず、近代の皿や茶碗類が多量に含まれたピットのたぐいだけが検出された。

このため土の層序を再精査して試掘調査の所見と照合すると、やはり骨壺の検出された面に一致すると判断できた。

さらに遺構検出を行ったところ調査区のほぼ中央南側付近に集中して壺の蓋らしいものと掘り方を数基確認することができた。しかもこれらは検出が進む過程で骨壺ではなく胞衣容器であることが理解された。

また、この層序を精査した際に現地表面下20cmに灰もしくは炭の層があることに気づいた。このことは、この付近で火災があったことを想定させた。

この結果をふまえ筑紫野市関連の新聞記事を調査すると大正2年7月15日付で二日市町で火災・11戸全焼の掲載記事と昭和21年4月18日付の報道に正行寺など23戸全焼の記事の掲載を確認することができた。

これらの記事から調査区付近の当時の状況を推測すると大正2年の記事では、広範囲での二日市町としかなく、この調査区付近の火災とは断定することができない。

また筑紫野市史・民俗編（第四節交易・交通）に掲載されている昭和初期の二日市の地図によれば正行寺の前面にあたる調査区には家屋の表示がなく建物が存在していたとは考え難い。

昭和21年の記事では、正行寺などと付近であった火災を確実に新聞報道されていて、調査区において確認された火災の痕跡は、この時期と考えることが妥当かと思われる。

これらから胞衣容器や近代の茶碗・皿等が埋められたピットの堆積する層序は、火災後に盛り土されたものと判別される。

なお試掘トレンチを再精査した結果、試掘時では確認されていない溝状の遺構や土坑状のプランが検出された。

この調査区内は推定条坊左郭19条2坊にあたることから大宰府関連の遺構が存在する可能性が考えられた。また調査区の東側は、条坊関連の遺構の検出される面より鷺田川に向かって下がっていくことも確認された。

これは近くに入舟の地名として残る江戸時代に開かれた川船関連の遺構の存在する可能性も否定できないことから一応胞衣容器や近代のピットの調査完了後に下の遺構面の調査を実施することとし、発掘調査は遺構検出面を上層・下層の二面として分けて実施した。

検出した主な遺構は、下記のとおりである。

胞衣容器	10基
ピット	91
埋甕	3基
土坑	3基
溝状遺構	2条

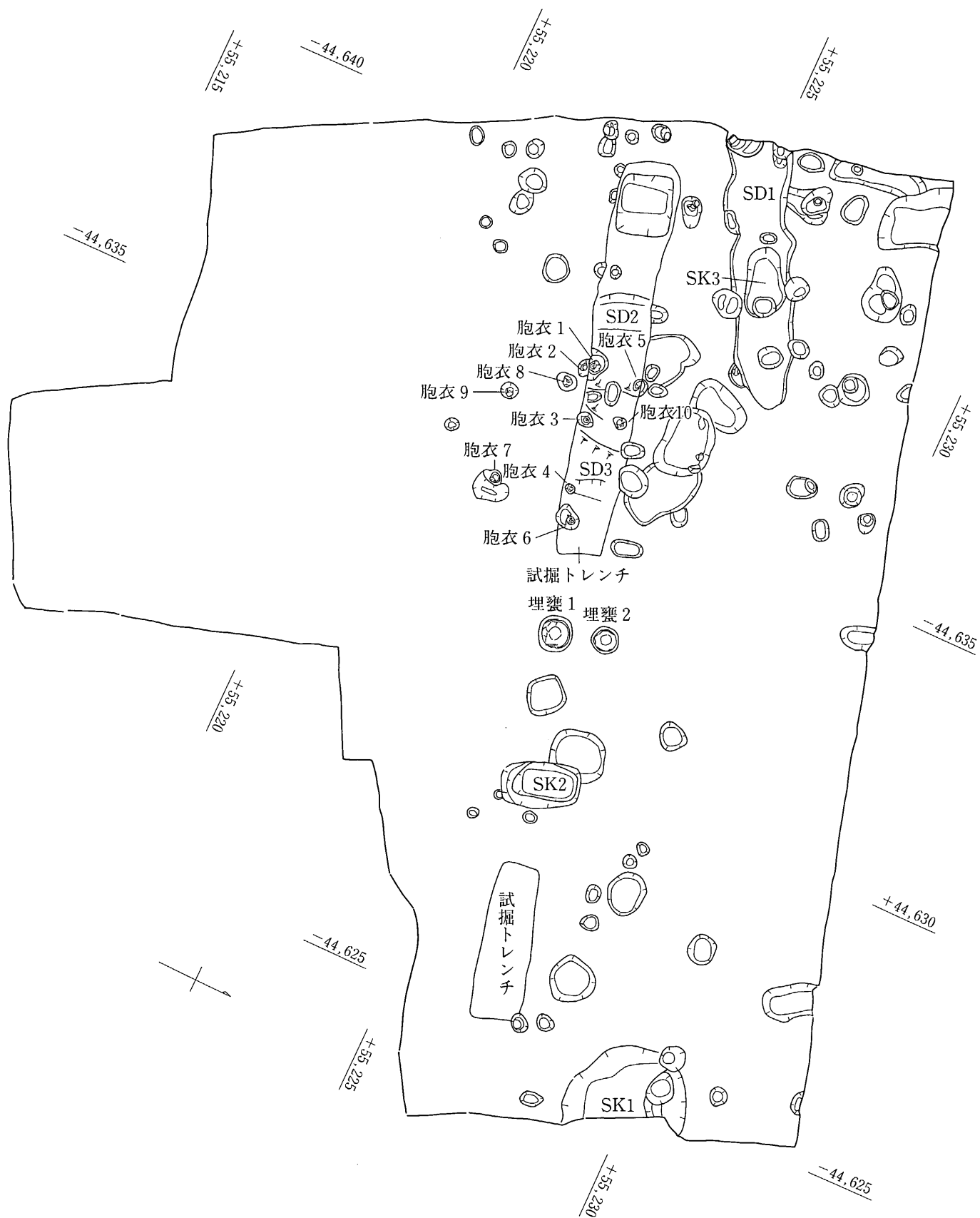


Fig.3 上面遺構配置図 (S1/100)

胞衣容器について

昭和40年以降は自宅においてお産をすることが減少し、胞衣容器なども最近では忘れ去られてすでに遠い言葉になっている。調査した契機で胞衣について民俗学の人生儀礼として紹介されるものを述べて改めて心にとどめたいと思う。

胞衣とは胎児を包んでいた膜、胎盤が子宮壁を離れて卵膜と共に娩出されるもので、後産と言われ、このあと処理の仕方は私達の先祖の“生命”に対する態度の一環であったと言えるものです。

産後の胞衣のことを“エナ”または“ヨナ”といい、その処置には①実家あるいは婚家の墓の隅の人の踏まない所に埋める。②お産をした納戸の床下に素焼きの壺に入れて埋める。また壺に入れない時は目印になる瓦などを置く。③畑や裏山の鬼門でない所に埋める。④人が踏むほどよいとして厩の入り口に埋めたり、人通りの多い辻に埋めた。など地方によっては正反対のものもあって違いが認められ、多様の儀礼がのこされていました。

「胞衣納」の儀式として文書に見えるものは、九条道家の日記あるいは蜷川親元の日記に記されています。これらは公家・武家の社会の儀礼の一端を表現したのですが胞衣納の古い事例として上げられる。これらの儀礼が一般に広まっていった時期は明確には分らないが、昭和の中頃まで連綿として行われていたことは、非常に興味深いものと考えられます。

また奈良市の京西中学校建設に伴う発掘調査で検出されたものが奈良時代の事例としてあげることができる。この事例から奈良時代には確実に胞衣埋納儀礼が成立していたと考えられる。水野正好氏によれば胞衣容器に副えられた遺物によって男女の区別が分けられるなどの可能性がつかいとも示されている。



PL.1 上面全景

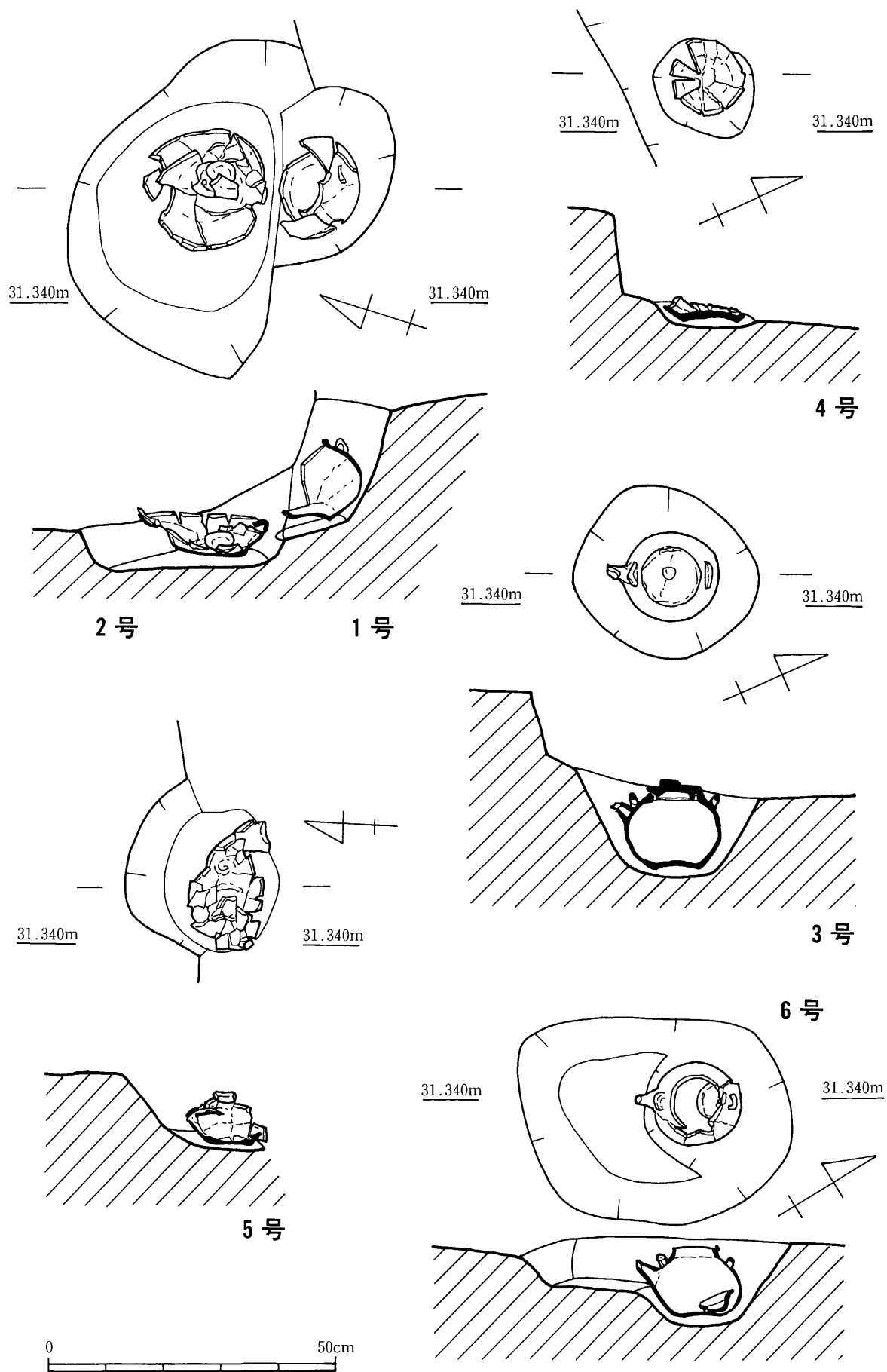
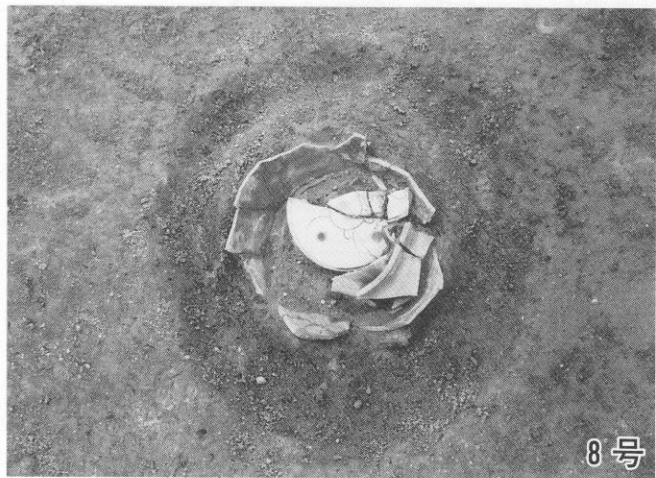


Fig.4 胞衣容器出土実測図-1 (S1/10)

PL.2 胞衣容器出土状况



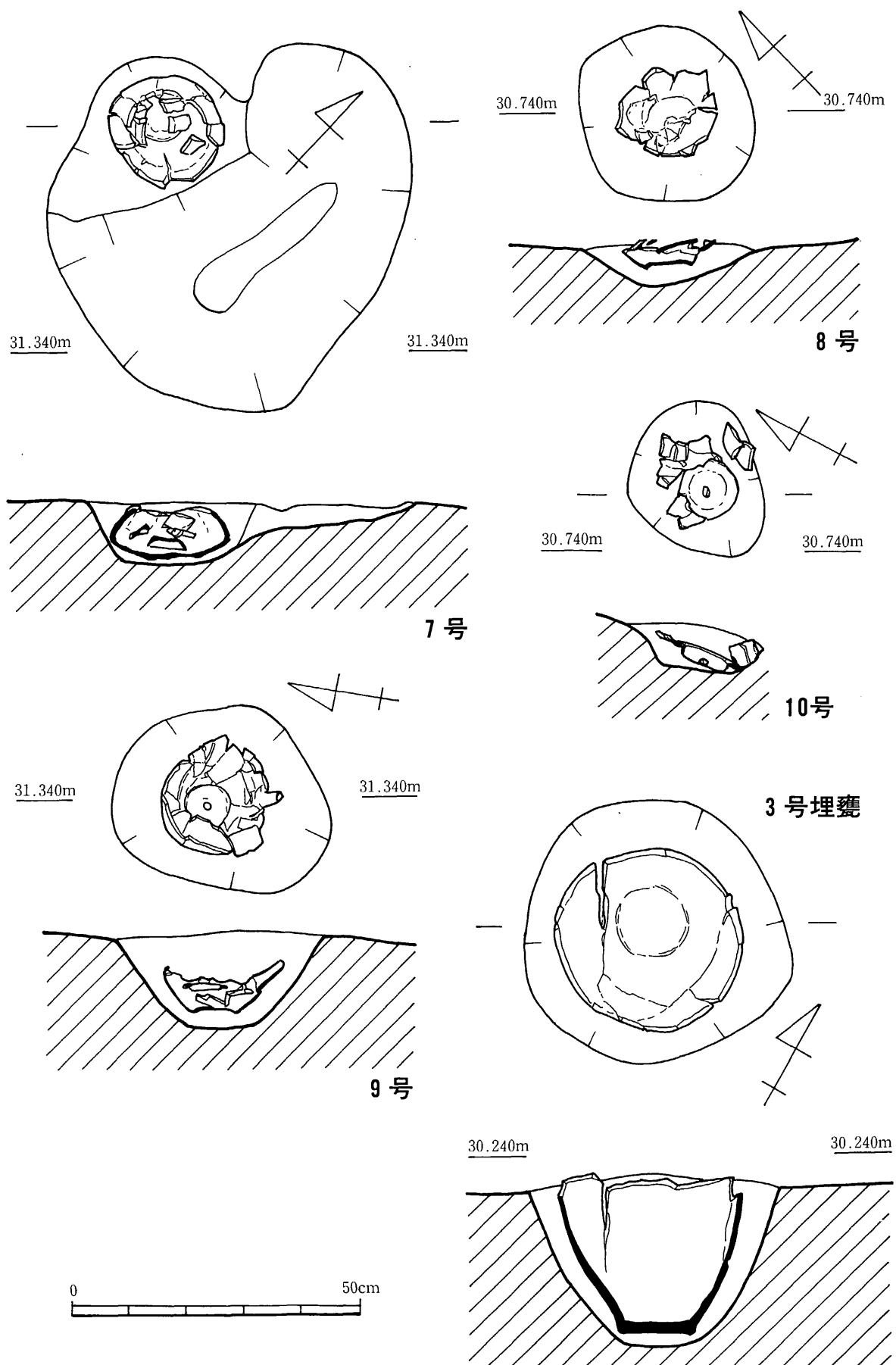
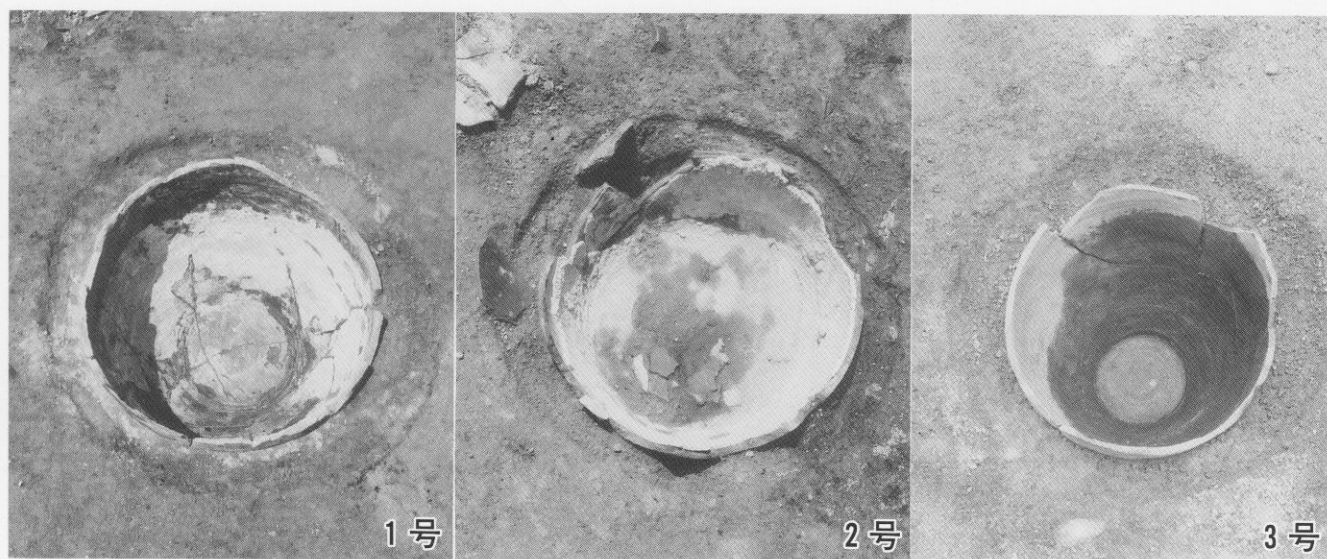


Fig.5 胞衣容器及び埋甕出土実測図－2 (S1/10)



PL.3 埋甕出土状況

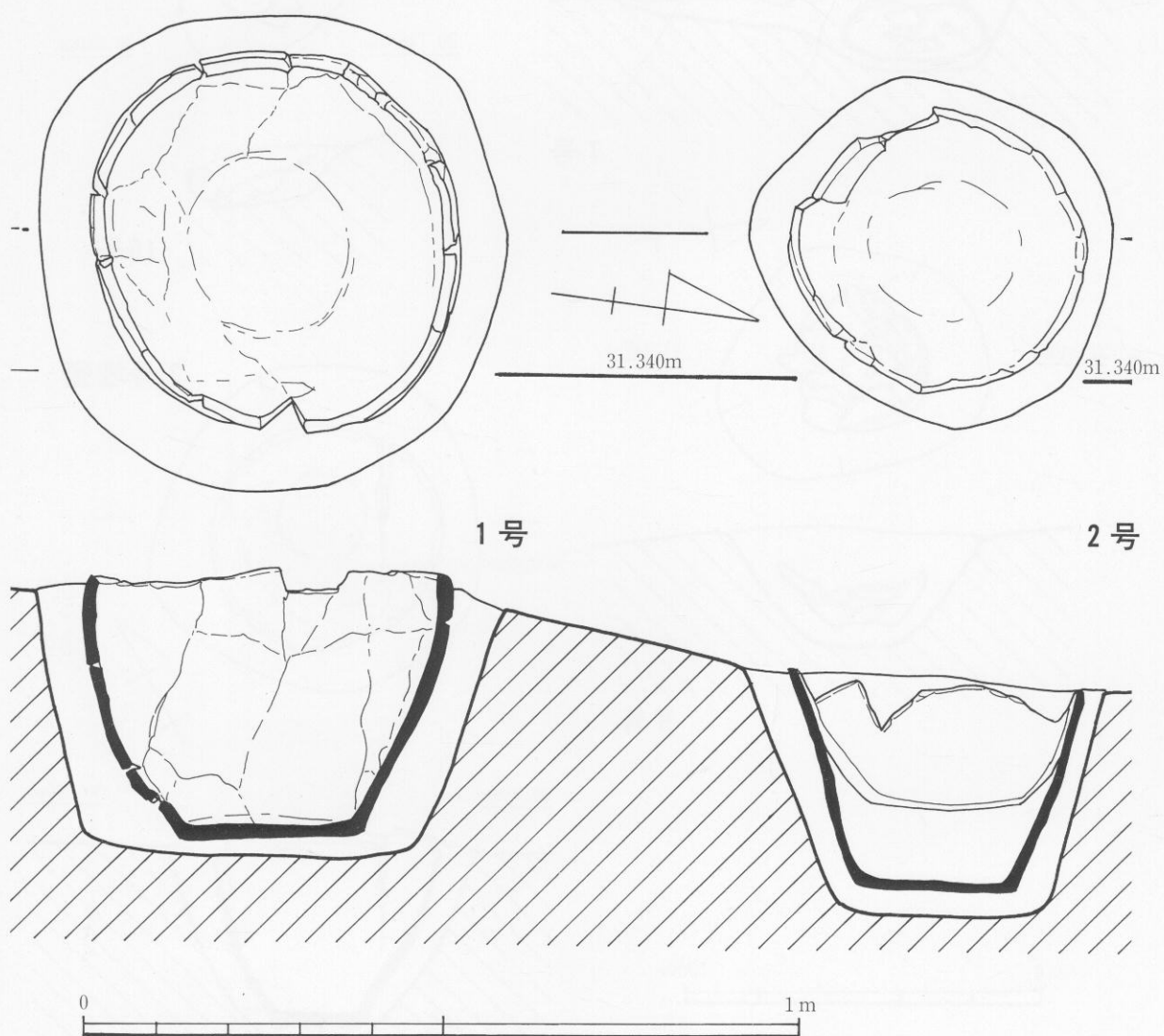
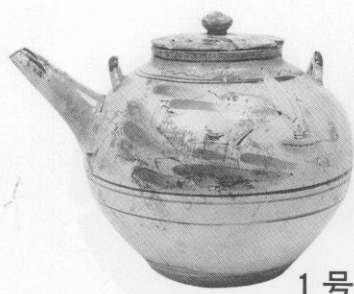


Fig.6 埋甕出土状況実測図 (S1/10)

PL.4 胞衣容器



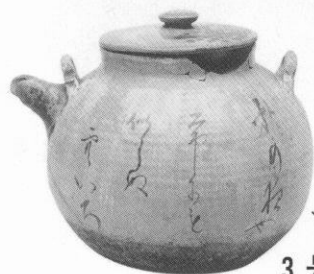
1号



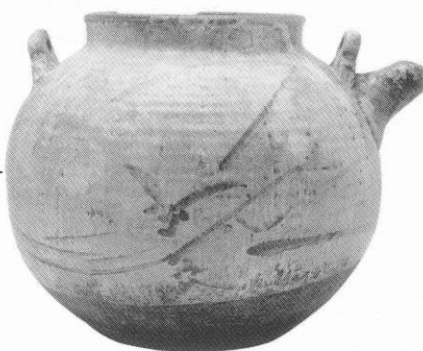
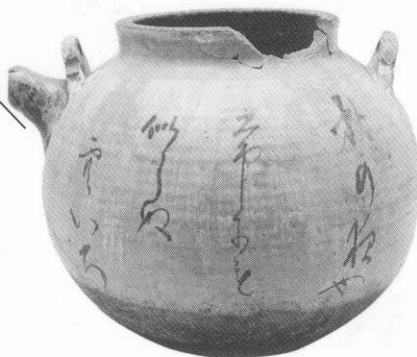
2号



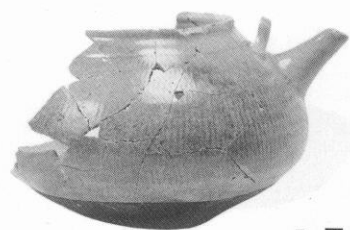
4号



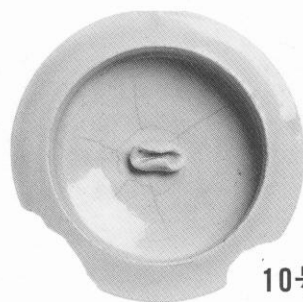
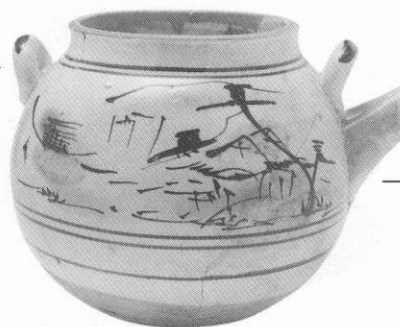
3号



6号



5号



10号



7号

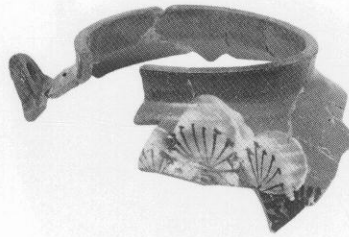


9号

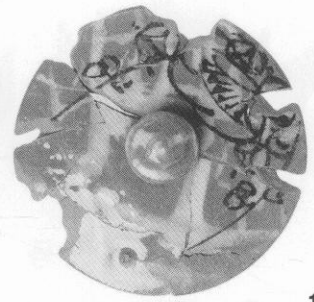
PL.5 胞衣容器及び出土遺物



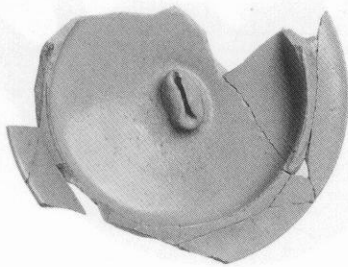
8号



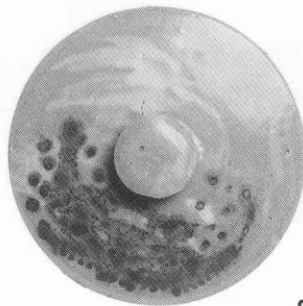
8号



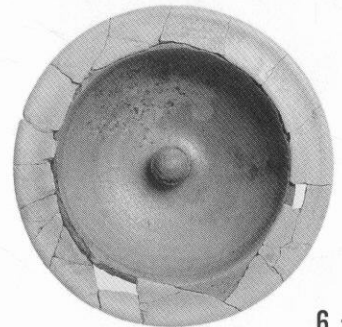
1号



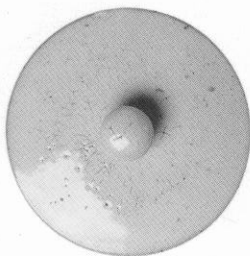
2号



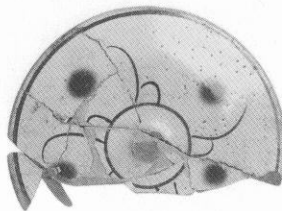
3号



6号



9号



8号



Fig.7-1



Fig.7-2



Fig.7-3



Fig.7-4



Fig.7-5



Fig.7-6

第152次調査出土の胞衣容器について

検出された胞衣容器は、10基を数える。検出時の状況 (Fig.3) を確認すると1・2号に切り合いがあるが、ほかは切り合うことなく各々が単独で検出された。

1号の掘り方は試掘トレンチによって切られているが楕円形を呈していたものと思われる。2号は1号に切られるが、これも掘り方は楕円形を呈す。また2号の容器内には、Fig.7-1・2に図示した小皿が収められていた。3号の検出時の掘り方は不整円を呈すが、試掘トレンチで掘り方上部が削られていることもあり明確でない。3号の掘り方から出土したFig.7-3・4の小皿についての出土状況は、不明確である。4号は試掘トレンチにより削平が著しく掘り方の形状は不明瞭。5号も掘り方の半分が試掘トレンチによって削平されているが、楕円形の形状であったと思われる。6号の掘り方は不整な寸づまりの長方形を呈し、底面は二段の掘り方をもつ。7号はカクランに切られるが楕円形の形状の掘り方を呈していたものと考えられる。この内部にも小皿 (Fig.7-5) が逆さまの状態に収められていた。8号の掘り方の形状は、やや角張った円形を呈し底の床面は平坦でない。9号の掘り方形状は、やはり楕円形を呈すと考えられる。10号の掘り方は、試掘トレンチに削平されて不整形をなす。10号の掘り方からも小皿 (Fig.7-6) が出土したが、出土状況は明確でない。以上のように容器として使用されたものは、7号を除くほとんどが、日常使用された土瓶である。埋置された時の状況のまま検出されたものは1・3・6号で、埋置後土圧などにより容器がつぶれた状況になったものに2・4・5・7・8・9号があげられる。10号は容器の蓋に別の土瓶のものを使用していて容器自体も割れた容器をもちいて、しかも、きちんと埋置しなかったのか検出状態は無造作な状態に蓋をしたという状況である。

4・7号がこれらのうちでは、古いものであり、2・10号が同様な蓋を使用していることから、ほぼ同一時期のものであると思われる。

また胞衣容器の出土した範囲をみると調査区の中央部西側に片寄って検出されている。このことは民俗事例から容器の検出された場所に納戸があった可能性が想定される。

埋甕について

胞衣容器の東側、調査区の中心部で検出された。南側より1号・2号とする。ともに甕の口縁部付近を打ち欠いたものを使用していて、内壁には石灰質のものが付着していたことから便槽と考えられる。ただ3号甕の内壁には石灰質の付着は確認されなかった。

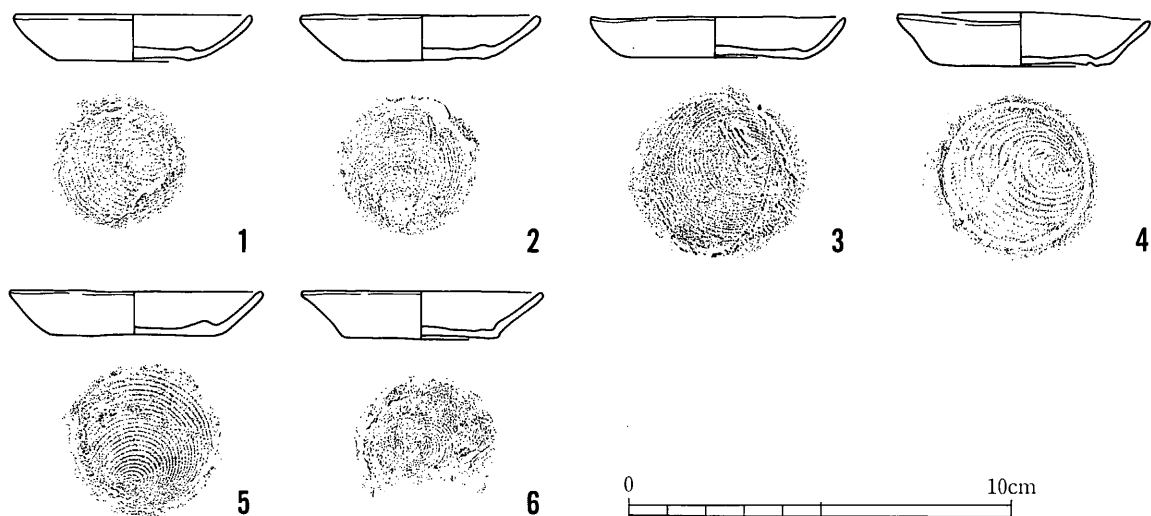


Fig.7 胞衣容器内出土遺物実測図 (S1/2)

IV. 下面の概要

試掘トレンチ内で確認した溝状遺構と南側の段落ちを中心に検出に努めた。

SD2 (Fig.11, PL.7)

北側は攪乱により当初の形状は確認できなかった。現存の長さ6,5mを測り、幅1,4～2 mである。

やや蛇行しながら北西から南東に向かって流れ主軸はN-8°-Wを測る南北溝で、南東側は後世の攪乱が著しく遺構が失われていて、ここでプランは確認できなくなる。深さは15～20cmを測り、底面は平坦に近いが、わずかに弧を描く。壁の立ち上がりは緩やかに斜めになり、断面形状はやや変形な逆台形状を呈す。

A～Dのラインの断面観察では上端が削平されている箇所もあり、本来の形状は逆台形状を呈していたものと思われる。埋土の堆積状況では、水が流れていたような痕跡は認められない。

遺物は、まったく出土せず時期決定ができない。

SD3 (Fig.10, PL.7)

SD2の東側にあって主軸はN-17°-Wを測り、僅かに蛇行するが、SD2よりは直線的で北西から南東に向かって流れている。SD2・3はほぼ平行している。北側はSD2と同様に攪乱によって切られ、SD2と同様な位置でプランが失われている。

現存長5 m、幅1～1,5mを測る。深さは最深部で1 m、フラット面では50cmとなる。

断面形状は、底面部が平坦に近く、東側の壁は直に近く立ち上がりをみせる。また西側の壁は、東側に比べると緩やかな傾斜で立ち上がり、底面から50～60cmの高さで一旦フラット面を形成して再び斜めに立ち上がり上端へと続く。またフラット面の幅は25～50cmと一定した面ではない。

断面形は片側だけが、二段掘りを呈す形状となる。

A～Dの断面観察では、SD2同様に上端が削平されている部分も確認される。また埋土の堆積状況では、フラット面のある西側より壁が崩壊し埋まっていた状況を示すとともに、ある一定期間は深さ50cm程度のU字状のものが遺存していたことも考えられる。

東側の段落ちについて

段落ちの基本層序では最終的な地山に到達するまでに砂の層が2～3 mも堆積していることから旧地形を検出することは断念し落ちの始まりだけに検出は止めた。

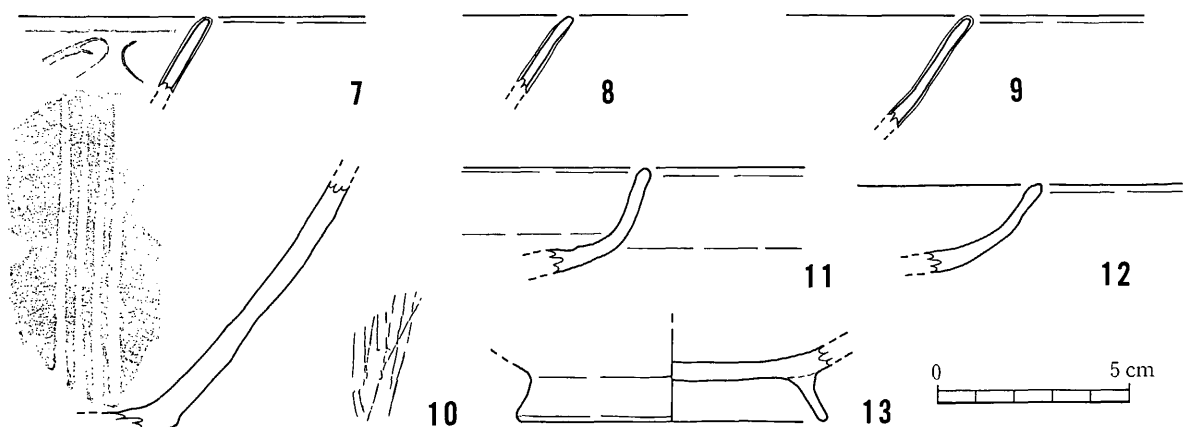
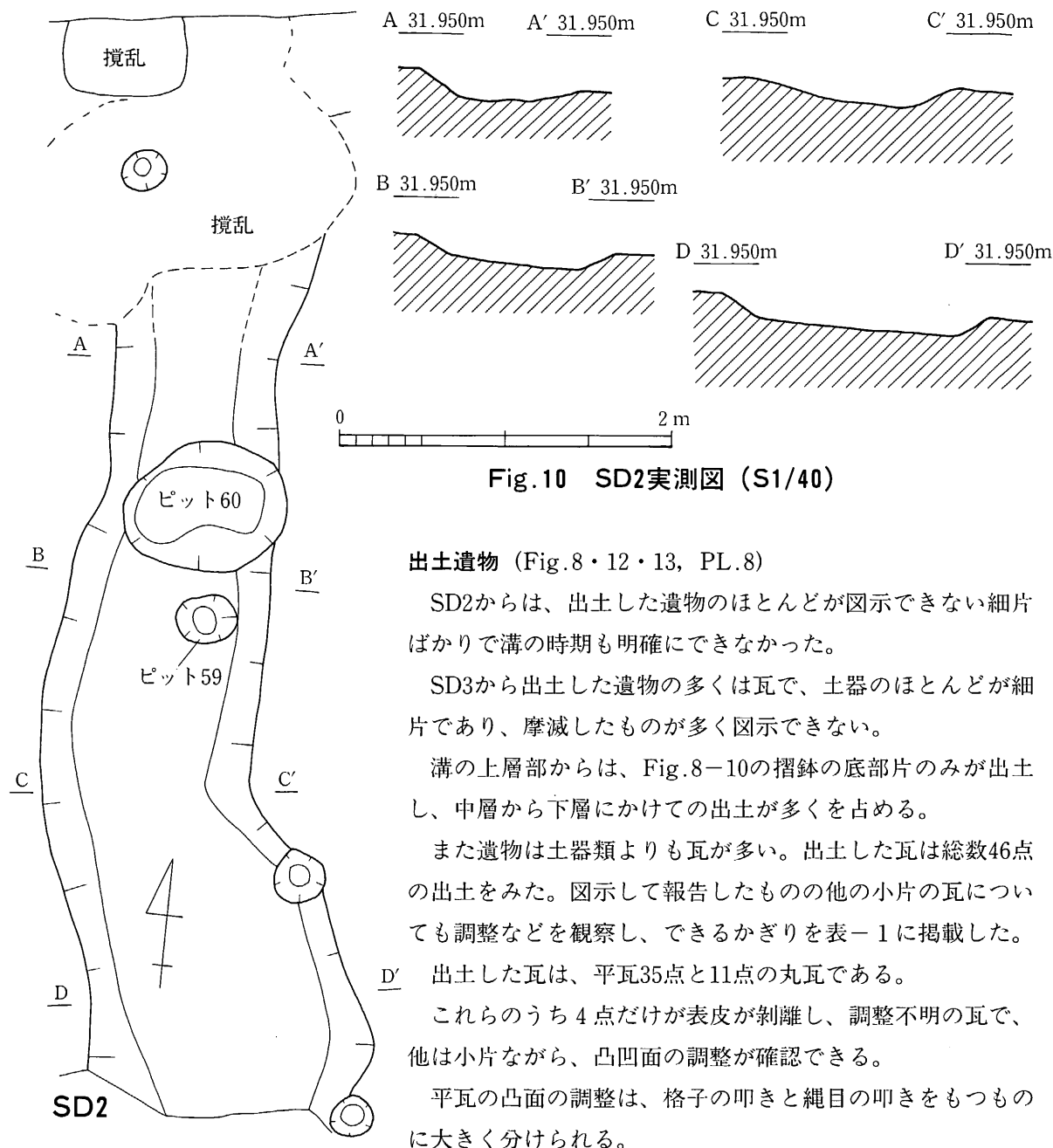


Fig.8 SD3出土遺物実測図 (S1/2)



Fig.9 下面遺構配置図 (S1/100)



出土遺物 (Fig.8・12・13, PL.8)

SD2からは、出土した遺物のほとんどが図示できない細片ばかりで溝の時期も明確にできなかった。

SD3から出土した遺物の多くは瓦で、土器のほとんどが細片であり、摩滅したものが多く図示できない。

溝の上層部からは、Fig.8-10の摺鉢の底部片のみが出土し、中層から下層にかけての出土が多くを占める。

また遺物は土器類よりも瓦が多い。出土した瓦は総数46点の出土をみた。図示して報告したものの他の小片の瓦についても調整などを観察し、できるかぎりを表-1に掲載した。

D 出土した瓦は、平瓦35点と11点の丸瓦である。

これらのうち4点だけが表皮が剥離し、調整不明の瓦で、他は小片ながら、凸凹面の調整が確認できる。

平瓦の凸面の調整は、格子の叩きと縄目の叩きをもつものに大きく分けられる。

出土した瓦の大半が格子目のもので占められ、この格子目にも粗いものと細めのものがあり、格子目は単線で表現されているものだけが出土している。

凹面の調整は、布目の痕跡をのこしたものとへらによってナデて仕上げたものと布目を一部だけナデて仕上げたものに分類できる。

丸瓦で玉縁を残して出土したものは、3点だけである。

このうちFig.12-14は、ほぼ完形品で凸面の調整は縄目の叩きをへらによってナデて仕上げている。凹面は布目痕を残し、側面の切り離しは糸によるもので細部の仕上げはへらでなされている。

15は玉縁が欠損してる瓦で、凸面の調整は格子目叩きをナデて仕上げているが丁寧でないために一部に格子目が残る。凹面は布目をナデによって仕上げている。20の瓦は、かろうじて玉縁を残し、凸面には格子目の叩きを凹面には布目を残したものである。

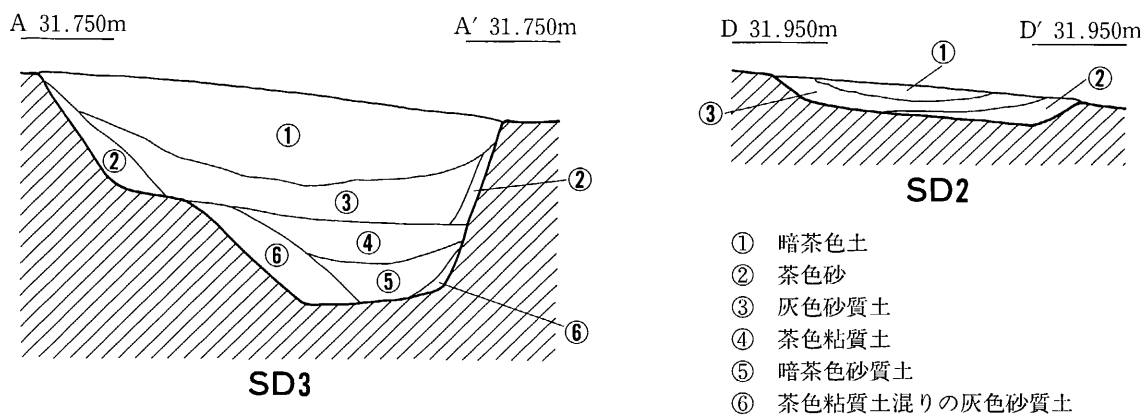
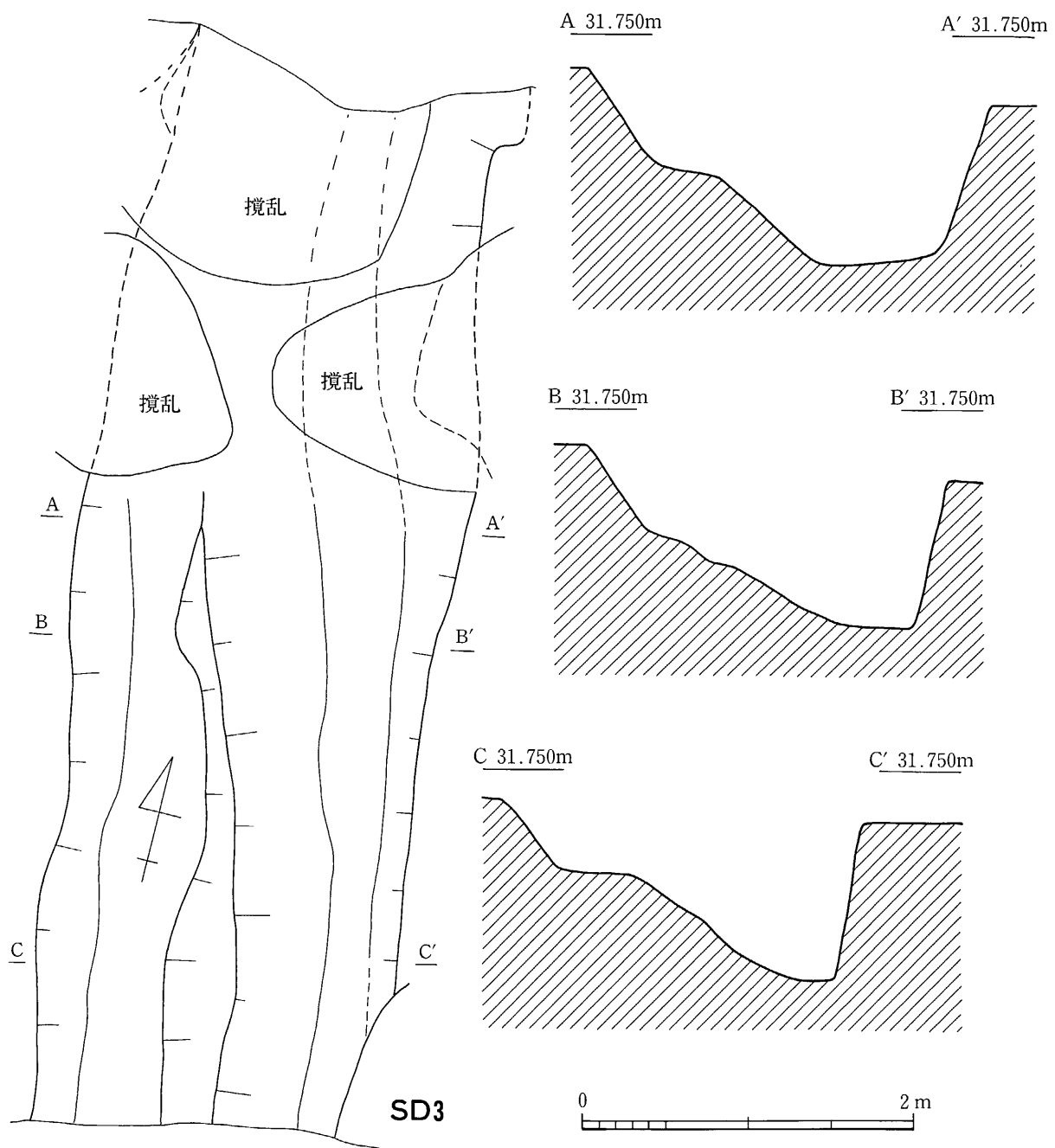


Fig.11 SD3実測図及びSD2・3土層図 (S1/40)

PL.6 下面全景



東から



南東から

PL.7 下面近景・SD2・3土層断面



南から



SD3



SD2

表-1

出土瓦計測表

号	種類	現在長 (cm)			粘土板 粘土紐	模骨痕	調 整		Fig番号
		長	幅	厚			凹 面 (裏)	凸 面 (表)	
1	丸	34.50	7.50	2.00			布目痕、ヘラナデ	縄目後ヘラナデ	Fig.12-14
2	"	27.30	10.25	1.50 1.70			布目一部ナデ	ヘラナデ	Fig.12-15
3	平	16.00	11.50	1.60 1.90			布目痕・糸切り痕	ヘラナデ	Fig.12-16
4	"	15.70	11.50	1.60 2.20			布目痕	タタキ後ナデ	Fig.12-17
5	"	18.20	14.80	1.80 2.10			タタキ後ヘラナデ	粗格子一部ナデ	Fig.12-18
6	丸	9.85	7.95	1.50 1.60			布目痕	タタキ後ナデ	Fig.12-19
7	玉縁付丸	16.30	9.30	1.90 2.30			布目痕	長方形・細格子	Fig.12-20
8	平	10.45	16.50	2.60			布目痕・糸切り痕	ヘラナデ	Fig.13-21
9	"	12.70	11.50	2.00 2.30			布目	中格子一部ナデ	Fig.13-22
10	"	10.08	10.01	1.90 2.40			ヘラナデ	格子目、一部ヘラナデ	
11	"	6.90	6.10	1.80 1.90			布目痕	細格子・その後ナデ	
12	"	12.01	8.40	2.80 3.20 3.40			布目痕部分的ナデ	縄目部分的ナデ	
13	"	16.00	14.20	1.80 1.90			布目痕	細格子一部ナデ	
14	"	14.01	12.50	2.10 2.20			布目痕、一部ナデ	粗格子およびナデ	
15	"	10.09	10.06	1.90 2.00			布目痕後ナデ	細格子、一部ナデ	
16	"	6.50	6.00	1.60 1.80			タタキ (?)	ヘラナデ (丁寧)	
17	"	10.40	8.80	1.70 1.90			布目痕、ナデ	粗格子、ナデ	
18	"	7.80	4.60	1.80 1.70			布目痕	細格子	
19	"	6.90	6.20	1.70 1.80			ナデ	ナデ	
20	"	8.00	7.30	1.50 2.20 2.00			ナデ	縄目	
21	"	8.10	7.30	1.90 1.90 2.00			布目痕	粗格子・ナデ	
22	"	8.70	6.10	1.70 2.00			ナデ	大きめ縄目	
23	"	9.00	5.40	1.90 2.00			布目痕	粗格子・ナデ	
24	"	9.00	6.10	1.80 1.90			布目痕ナデ	細格子一部ナデ	
25	"	6.20	3.50	1.70 1.70			ナデ	ナデ	
26	"	6.30	3.70	1.60 1.30			はじけて調整不明	はじけて調整不明	
27	"	9.70	8.40	1.70 1.80			表皮剥離調整不明	表皮剥離調整不明	
28	"	8.30	7.70	1.60 1.70			ナデ	ナデ	
29	"	7.50	3.70	1.80 2.20			ナデ	ナデ	
30	"	5.90	5.70	1.60 1.60			ナデ	ナデ	
31	"	10.00	9.50	2.00 2.20			布目痕、ナデ	縄格子	
32	"	12.00	6.70	1.70 2.00			布目痕一部ナデ	ヘラナデ	
33	"	9.80	7.90	1.90 2.00			ナデ	表皮剥離調整不明	
34	"	8.20	6.10	2.00 2.10			布目痕 (細)	細格子	
35	"	5.80	5.20	1.90 2.00			ナデ	縄格子	
36	"	10.20	7.90	1.70 1.80			タタキ (?)	粗格子・ナデ	
37	"	14.50	12.40	1.90 2.40			ナデ (ヘラ状)	ナデ (ヘラ)	
38	"	10.50	9.50	1.90 1.90			ナデ (ヘラ)	ナデ	
39	"	12.00	11.00	1.70 1.80			布目痕一部ナデ	縄目	
40	丸	11.20	10.40	1.60 1.80			布目痕	細格子	
41	玉縁付丸	11.20	8.50	1.20 1.20			布目痕	表皮剥離調整不明	
42	丸	11.00	8.40	1.60 1.70			ナデ (ヘラ)	ナデ	
43	"	8.30	6.10	1.90 2.30			布目痕	ナデ	
44	"	7.30	6.50	1.70 1.80			ナデ (煤付着)	中粗格子	
45	"	7.60	7.00	1.70 1.80			布目	表皮剥離不明	
46	"	5.30	5.10	1.50 1.50			ナデ (煤付着)	ナデ	

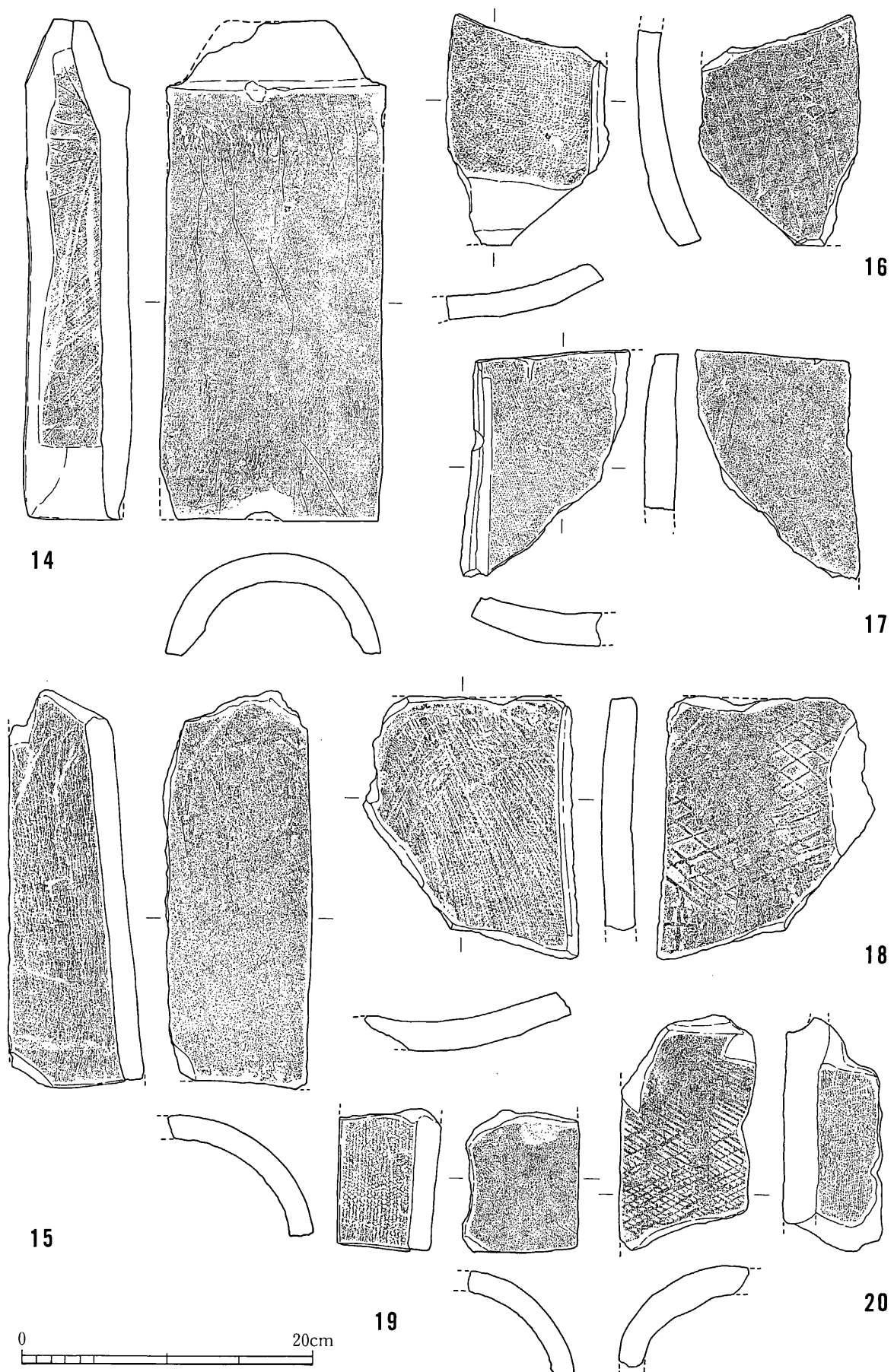


Fig.12 SD3出土瓦実測図－1 (S1/4)

平瓦では、凹凸面の両面をナデて仕上げたものは6点を数える。

同様な調整をもつ丸瓦は、1点だけである。また平瓦の凹面にもタタキを残すものが2点含まれる。

凹面の布目痕が、円弧を描くものも僅かに含まれている。

平瓦・丸瓦ともに側面部の形状や切断面の再調整などは、出土した瓦片が側面部を残したものが僅かしかなく観察できるものは少ない。

まれに糸切り痕やケズリ調整したものや面取り調整を確認できるものがあるが、分類できる数ではなく、表示だけでとどめた。

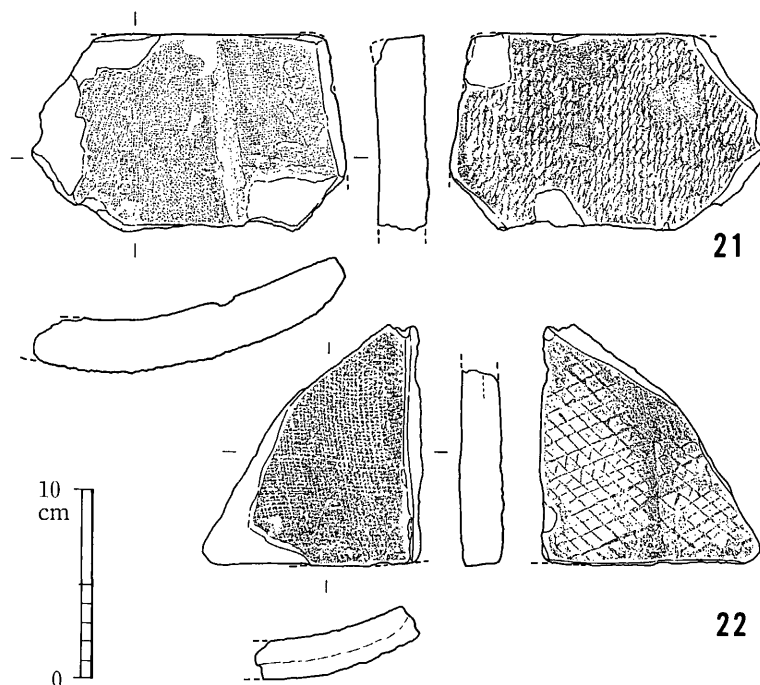


Fig.13 SD3出土瓦実測図-2 (S1/4)

V. ま と め

調査地点は、先述したように推定条坊19条2坊にあたることから大宰府関連の遺構が所在している可能性を考えた。しかしながら、この周辺域は天正年間より宿場町として栄えてきたこともあり、調査の結果は大宰府関連と考えられるものは下面で検出したSD2・3の溝状遺構と考えられる。また溝状遺構は鷺田川へ向かう途中で失われていて完結せず、多少蛇行しているがおおむね東西方向に位置していると考えられる。ただ明確に時期決定できるほどの遺物の出土はないが、SD3については平安時代以降中世には所在したものと思われる。SD2の時期については不明であるが、両者はほぼ平行して存在することから何らかの関連を考えることは可能であろう。

溝の途切れる所から南側は、現地表面より下に2mほどで下面の調査で検出したような遺構しかなく、遺物についても時期的に近接している。

その下層は砂混じりの堆積層が積み重なるだけで遺構面を形成する層位や遺物など殆ど確認できなかった。このことから、これらの段落ちの中世以降、川が入り込んでいたとも考えられ、その時に古代の遺構は失われたものと考えられることができる。

その後の川船関連の遺構については、地山面に達するまでに地表面から4m近くなるために調査は断念し、なんら成果をあげることはできなかった。

出土した胎衣容器の時代についてはさておいても、発掘調査で胎衣容器が検出される機会は多く、惰性的な感覚で、ただ胎衣容器が出たとして取り扱ってきた。今回の出土により、改めて胎衣についての民俗事例や歴史に登場する古い胎衣容器について勉学の機会を得たことに感謝したい。

胎衣容器が古くは奈良時代より所在すること、つい40数年前まで使用されていたことを考えると私達を取り巻く人生儀礼として忘れるべきでは、ないことを痛感した。このことは私達の先祖の生命に対する態度を示したものであり、私達も忘れてはいけない大切なものであろう。

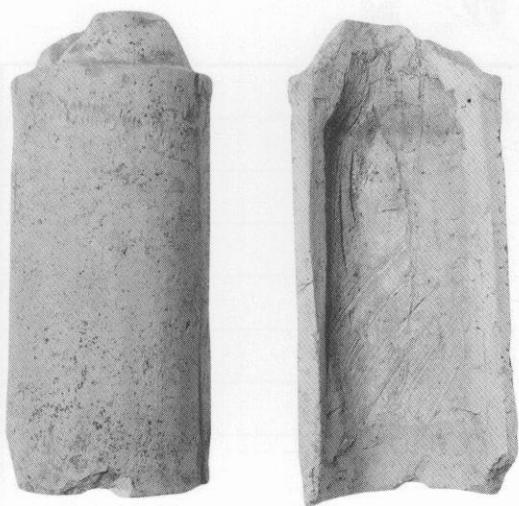


Fig. 12-14

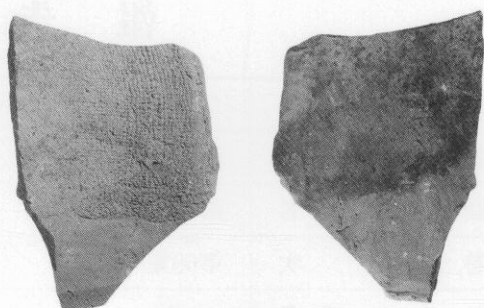


Fig. 12-16

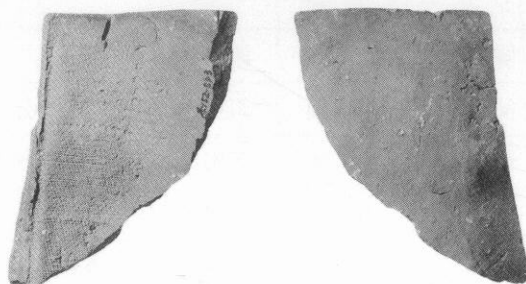


Fig. 12-17



Fig. 12-15

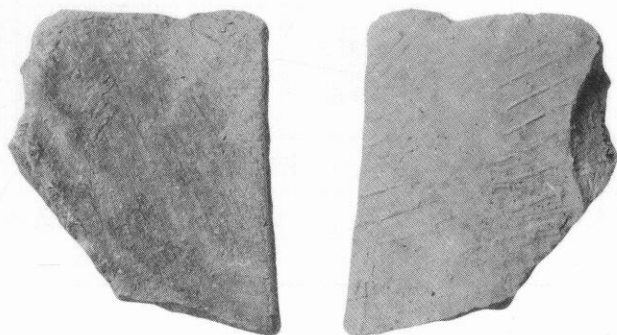


Fig. 12-18

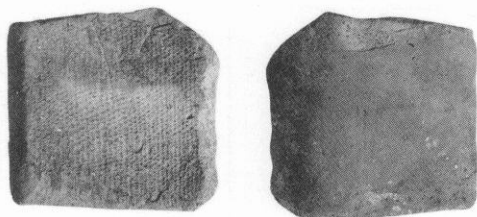


Fig. 12-19

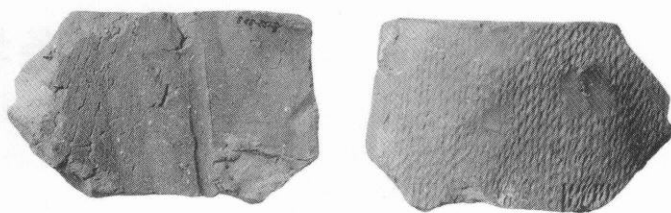


Fig. 13-21

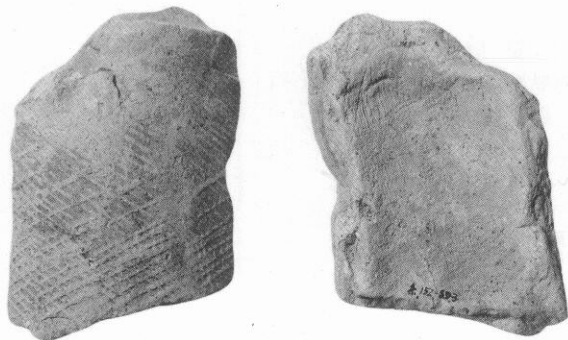


Fig. 12-20



Fig. 13-22

報 告 書 抄 録

ふ り が な	だざいふじょうほうあと							
書 名	大宰府条坊跡							
副 書 名	第152次発掘調査							
巻 次	第69集							
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 集 者 名	渡 邊 和 子							
編 集 機 関	筑紫野市教育委員会							
所 在 地	〒818-8686 筑紫野市大字二日市西1-1-1 TEL 092-923-1111(代)							
発 行 年 月 日	西暦2001年12月25日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
だざいふあと 大宰府跡	ちくしのし 筑紫野市 ふつかいち 二日市	176	210044	32度 35分 45秒	131度 35分 18秒	940601 } 940630	365.46 m ²	修練道場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
大宰府条坊跡	集落	近代 平安	溝状遺構 ピット	瓦				

大宰府条坊跡

第 152 次 発 掘 調 査

筑紫野市文化財調査報告書

第69集

平成13年12月25日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会

〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市西1-1-1

TEL 092-923-1111(代)

FAX 092-923-9644

印 刷 大 同 印 刷 株 式 会 社

〒840-0815 佐賀市天神一丁目1番32号

TEL 0952-24-8450(代)

FAX 0952-28-5583

URL <http://www.daidou-jp.com>.